

2. 先行研究

まず、「なら」について論じた先行研究に久野（1973）が挙げられる。久野（1973：108）は「なら」について「話し手は、S1を聞き手（あるいは人一般）の断定として、完全に同意しないまま（すなわち自分自身は、その正否に対する判断を下さずに）提出する。S2は、話し手の判断・意思・決意・要求・命令を表さなければならぬ」と述べ、前件と後件それぞれの特徴を指摘している。しかし、蓮沼（1985：69）は他者の意向・主張が関与しない場合があることを指摘し、この場合について「Pを真の命題として設定する」としている。また、これに類似した主張が益岡（1993：12）においても見られ、「前件が成り立つことを仮に想定し、その想定のもとで、後件で判断・態度の表明がおこなわれる」とされている。一方、「なら」が非過去形と過去形の両方に接続することができる点に注目し、両者の違いを説明した研究に国立国語研究所（1964）がある。国立国語研究所（1964：158）は『「～たなら」が前件の完了を条件とし、後件は前件よりも時間的にあとのばあいにもちいられるのに対して、「～るなら」はかならずしもそうでない』と述べ、「非過去形＋なら」は予定ないし意思を前提にするもの、「過去形＋なら」は完了を前提にするものとしている。

次に、「-tamyen」について論じた先行研究にはイ・クァンホ（1980）が挙げられる。イ・クァンホ（1980：51）は「-tamyen」が深層で「-tako hamyen（とすれば）」の変形と見なすことができるとし、「-tamyen」について「客観的な条件構文を形成する」と述べている。これとは異なり、事実性の観点から「-tamyen」を説明しようとした研究にパク・スンユン（1988）がある。パク・スンユン（1988）は、「-tamyen」が前件で不確実な世界か仮定の世界を表す場合にのみ自然に用いられる点に注目し、「-tamyen」を「非事実性の条件標識」と主張している。一方、「-tamyen」が接続するテンス形式について詳細に論じた先行研究は見当たらないものの、キム・ミニョン（2009：101）では「-tamyen」を「後件の時制が前件の時制を支配し、前件が相対時制で解釈される場合」に分類されているのに対し、オ・ユンギョン（2019：463）では『過去時制の先語末語尾「-ass/ess-」と結合すると、過去の時点でまだ実現されていない条件的事態を意味する』という言及が見られ、両者ともに意見が分かれている。

最後に、「なら」と「-tamyen」を対照分析した先行研究に金智賢（2018）が挙げられる。金智賢（2018）は、「なら」と「-tamyen」はともに前提条件を表すが、「なら」は「-tamyen」と比べて前提性が低いとしている。しかし、(2)で見られる相違については触れておらず、前提性で説明することも難しい。一方、「なら」と「-tamyen」が接続するテンス形式について論じた研究に金恩希（1995）がある。金恩希（1995：187）は『「なら／-tamyen」条件文では、先行節の時は先行節の時制によって、後行節の時は後行節の時制によって、それぞれ独自に決定される』と述べ、接続するテンス形式の選択基準が同様であるとしている。だが、(1)のように接続するテンス形式が異なる場合もあり、接続するテンス形式の選択基準は異なると考えられる。

以上のように、「なら」と「-tamyen」は様々な観点から論じられてきたが、日韓対照の観点からの詳細な分析はなされておらず、両形式の相違点も未だ明確ではない。したがって、本発表では日韓対照の観点から「なら」と「-tamyen」の相違点を明らかにする。

3. 接続するテンス形式の選択基準における相違

「なら」と「-tamyen」の相違点として、まず、接続するテンス形式の選択基準が挙げられる。金恩希（1995）では両形式が同様の選択基準で接続するテンス形式を選択するとされているが、異なるテンス形式を選択することがある。

- (3) a. この機会を {逃すなら／逃したなら}、もう二度と彼には会えないだろう。

(6) では既に起こったと新たに知った事態を仮定しているが、「なら」と「-tamyen」がともに過去形にのみ接続している。(3) ~ (5) と (6) を比較してみると、発話時を基準にした時間軸上の事態の位置が異なっていることがわかる。(3) ~ (5) ではいずれも発話時から非過去の事態を表しているのに対し、(6) では過去の事態を表している。すなわち、「-tamyen」は仮定する事態が発話時から過去の事態か非過去の事態かが接続するテンス形式の選択において重要であると言える。なお、(6) において「なら」が過去形にのみ接続するのは、新たに知った事態が既に起こった事態であり、その事態を根拠に判断を下しているため、事態が実現・完了した状況を仮定することになるためである。

以上から、「なら」はアスペクト的な基準で接続するテンス形式を選択するのに対し、「-tamyen」はテンス的な基準で選択すると言えるだろう。

4. 使い方における相違

次に、「なら」と「-tamyen」は使い方においても相違が見られる。

- (7) a. どうせ落第するなら、あんなに努力するんじゃないかった。
 b. echaphi {?nakceyha-n-tamyen / ? nakceyha-yss-tamyen} kulehkey
 どうせ 落第する- [非過去] -TAMYEN 落第する- [過去] -TAMYEN あんなに
 nolyekha-nun ke-y ani-ess-ta.
 努力する- [現在連体] の- [否定] - [過去] - [叙述] (= (2))
- (8) a. 「実はあのあとすぐに財布が見つかったの」
 「そんなに簡単に見つかったなら、あちこち探すんじゃないかった」 (蓮沼他 2001 : 62)
 b. “silun ku hwu-ey palo cikap-ul chac-ass-e”
 実は あの あと-に すぐ 財布-を 見つける- [過去] - [叙述]
 “kulehkey swip-key {?chac-nun-tamyen / ?chac-ass-tamyen}
 そんなに 簡単- [副詞] 見つける- [非過去] -TAMYEN 見つける- [過去] -TAMYEN
 yekiceki chac-nun ke-y ani-ess-e”
 あちこち 探す- [現在連体] の- [否定] - [過去] - [叙述] (筆者訳)

(7) (8) では、前件で実現を知った事態を表し、後件では前件の事態を知ることによって生じた過去の行為に対する後悔・残念な気持ちを表している。しかし、(7) と (8) は前件の事態についての話し手の知識状態が異なる。(7) の「落第する」という事態は話し手が直接確認した事態であり、事実として認知しているのに対し、(8) の「(財布を) 簡単に見つかった」という事態は新たに知ったばかりの事態であり、まだ事実として認知されていない (Akatsuka 1985)。また、この違いは接続するテンス形式にも現れる。(7a) では「なら」が非過去形に接続しており、過去形に接続すると不自然であるが、これは過去形に接続すると前件で「どうせ落第した」という事実そのものを表すことになり、仮定的な意味がなくなるためであると言える。それに対し、「なら」が非過去形に接続すると、「落第する」という事態がまだ実現・完了していない状況を表すことになり、事実とは異なる事態を仮定することになる。一方、(8a) では「なら」が過去形に接続しているが、これは「(財布を) 簡単に見つかった」という事態がまだ事実として認知されておらず、事実そのものを

表しているのではなく、事実か否か不確かな事態を仮定しているためであると言える。なお、(8a) では「なら」が非過去形に接続しても自然であるが、これは話し手が「(財布を) 簡単に見つかる」という事態がまだ実現・完了していない状況を仮定するか、既に実現・完了した状況を仮定するかによって非過去形／過去形の選択が異なると言える。

このように、「なら」は話し手の知識状態によって接続するテンス形式に違いはありつつも自然に用いられるが、「-tamyen」はいずれも不自然である。このことについて、奈良 (2006) は「前件—事実、後件—反事実」の組み合わせが日本語では成立するのに対し韓国語では成立しないと、前件と後件の現実における事実性の組み合わせにおいて日本語と韓国語で異なると説明している。だが、「前件—事実、後件—反事実」の組み合わせでも、「-tamyen」が自然に用いられることがある。

- (9) (共同会見が避けられなかったため、収録放送の形態をとったと聞いて)

kongtong hoykyen-i pwulkaphiha-yss-tamyen sayngpangsong hyengthay-lul
 共同会見-が 避けられない- [過去] -TAMYEN 生放送 形態-を
 chwiha-yss-eya ha-nta.
 とる- [過去] - [義務] - [叙述]

(共同会見が避けられなかったなら、生放送の形態をとるべきだった。) (21世紀世宗コーパス)

(9) では、(8) と同様に、前件で他人から聞いて知った事態を表し、後件では「収録放送の形態をとった」という事実と反する内容を表している。しかし (8) とは異なり、(9) では「-tamyen」が自然に用いられている。これは、(8) と (9) を比較してみると、仮定の背景が異なっていることがわかる。(8) は「(財布を) そんなに簡単に見つかる」と知らなかったため、あちこち探した」という一連の事態が事実として背景にあるのに対し、(9) はそのような背景がない。すなわち、ある事実が仮定の背景にない場合は「-tamyen」も自然に用いられると言える。だが、ある事実が仮定の背景にあるからといって、「-tamyen」が全く不自然であるわけではない。前件に「cwul al-ass- (と知っていた)」を補い、当該事態が起こると前もって知っていた状況を仮定すると、ある事実が仮定の背景にあっても「-tamyen」も自然に用いられる。

- (10) echaphi nakceyha-l cwul al-ass-tamyen kulehkey
 どうせ 落第する- [未来連体] と知る- [過去] -TAMYEN あんなに
 nolyekha-ci anh-ass-ul kesita.
 努力する- [否定] - [過去] -だろう

(どうせ落第すると知っていたなら、あんなに努力しなかつたらう。) (cf. (2))

- (11) kulehkey swip-key chac-ul cwul al-ass-tamyen yekiceki
 そんなに 簡単- [副詞] 見つける- [未来連体] と知る- [過去] -TAMYEN あちこち
 an chac-ass-ul kesita.
 [否定] 探す- [過去] -だろう

(そんなに簡単に見つけると知っていたなら、あちこち探さなかつたらう。) (cf. (8))

当該事態が起こると前もって知っていた状況を仮定するということは、当該事態が起こると知らなかったという背景にある事実に基づいて仮定するということを意味する。すなわち、「なら」はある事実が背景にある

か否かは関係なく、前件で事態の実現のみを表して仮定することが可能であるのに対し、「-tamyen」はある事実が背景にない場合は事態の実現のみを表して仮定することが可能であるが、ある事実が仮定の背景にある場合はその背景の事実と反する状況を表して仮定する必要があると言える。さらに、このことは (1) ~ (6) にも共通することである。(1) ~ (6) ではある事実が仮定の背景にないため、前件で事態の実現のみを表して仮定することができ、「なら」と「-tamyen」が対応関係をなすと言える。

ただし、ある事実が仮定の背景にあるからといって、「-tamyen」は必ずしも「cwul al-ass- (と知っていた)」を補わなければならないわけではない。

(12) a. もっと注意したなら、事故はおこらなかつただろう。 (蓮沼他 2001 : 59)

b. cokum te cwuuyha-yss-tamyen sako-nun ilena-ci anh-ass-ul kesita.
もっと 注意する- [過去] -TAMYEN 事故-は 起こる- [否定] - [過去] -だろう (筆者訳)

(12) では「もっと注意した」という状況を仮定し、その状況下では「事故は起こらなかつただろう」という判断を表しているが、その背景には「もっと注意しなかつたため、事故が起こった」という事実がある。この場合も背景にある事実に基づいて仮定している点では (10) (11) と同様であるが、「-tamyen」の前に「cwul al-ass- (と知っていた)」を補わなくても、「なら」と「-tamyen」が自然に用いられる。これは、(10) (11) の背景にあるのは「当該事態が起こると知らなかつた」であるのに対し、(12) の背景にあるのは「当該事態が起こらなかつた」であるためである。すなわち、(10) (11) では背景の事実と反する「当該事態が起こると知っていた」という状況を仮定するために「cwul al-ass- (と知っていた)」を補う必要があるのに対し、(12) で背景の事実と反する事態は「当該事態が起こった」であるため、「cwul al-ass- (と知っていた)」を補う必要がないのである。

以上のように、「なら」は仮定の背景の有無に関係なく前件で事態の実現のみ表して仮定することができるのに対し、「-tamyen」は仮定の背景がない場合は前件で事態の実現のみ表して仮定することができるが、仮定の背景がある場合は背景の事実と反する事態を表して仮定する必要がある。

5. 「なら」と「-tamyen」の焦点化における相違

これまでの分析から、「なら」と「-tamyen」は接続するテンス形式の選択基準と用い方において相違点があることがわかった。ここでは、両形式の間にこれらの相違が生じる背景について考える。

4 節において、ある事実が仮定の背景にある場合、「なら」は前件で事実の実現のみを表して仮定することができるのに対し、「-tamyen」は背景の事実と反する事態を表して仮定するという相違点があることを確認した。このように、同様の意味を表すにもかかわらず言語化において相違が見られるということは、「なら」と「-tamyen」で焦点化 (focusing) される部分が異なることを意味する。「なら」はある事実が仮定の背景にあるか否かは関係なく、前件で事態の実現のみを表して仮定することができるが、これは、仮定する事態そのものに焦点が当てられることを意味する。そのため、ある事実が仮定の背景にあってもその背景との関係は背景化 (backgrounding) され、仮定する事態のみが前景化 (foregrounding) されるのである。それに対し、「-tamyen」はある事実が仮定の背景にある場合は前件で背景の事実と反する状況を表して仮定しなければならないが、ある事実が仮定の背景にない場合は前件で事態の実現のみ表して仮定することができる。これは、ある事実が仮定の背景にあるか否かが重要であることを意味しており、言い換えると、話し手の既有知識との関係に焦点が当てられることを意味する。そのため、話し手の既有知識との関係を前景化して言語化せず、

背景化されると不自然になるのである。

また、「なら」と「-tamyen」の焦点化の違いは、接続するテンス形式の選択基準とも関連がある。3節において、「なら」はまだ実現・完了していない事態を仮定するか、既の実現・完了した事態を仮定するかによって選択が異なったが、「なら」が仮定する事態に焦点が当てられるものであるため、接続するテンス形式の選択においても、まだ実現・完了していないか、既の実現・完了したかという事態そのもののアスペクト的な特徴が基準になると言える。一方、「-tamyen」は発話時を基準に過去の事態を仮定するか、非過去の事態を仮定するかによって選択が異なったが、「-tamyen」が話し手の既有知識との関係に焦点が当てられるものであり、既有知識は発話時においてどのようにしているかが問題になるため、接続するテンス形式の選択においても発話時が基準になると言える。

以上から、「なら」と「-tamyen」の間に見られる相違は、「なら」は仮定する事態そのものに焦点が当てられるのに対し、「-tamyen」は話し手の既有知識に焦点が当てられるという焦点化の違いがその背景にあると言えるだろう。

6. まとめ

本発表では、従来対応関係をなすと言われている現代日本語の条件を表す「なら」と現代韓国語の「-tamyen」を対照分析した。その結果、「なら」と「-tamyen」は接続するテンス形式の選択基準と用い方において相違があることを指摘し、その背景には「なら」と「-tamyen」で焦点化される部分が異なることを主張した。しかし、本発表で分析の対象としたのは両形式が用言に接続する場合であり、体言などに接続する場合については触れることができなかった。この点については今後の課題としたい。

参考文献

- 金恩希 (1995) 『条件文の日・韓対照研究』 広島大学大学院文学研究科言語学専攻博士論文.
- 金智賢 (2018) 『現代日本語と韓国語における条件表現の対照研究』 ひつじ書房.
- 久野暲 (1973) 『日本文法研究』 大修館書店.
- グループ・ジャマシイ (2011) 『日本語文型辞典 韓国語版』 くろしお出版.
- 国立国語研究所 (1964) 『現代雑誌九十種の用語用字 第3分冊：分析』 秀英出版.
- 奈良夕里枝 (2006) 「韓国語条件表現 -으면-umyen, -거든-ketun, -어야-eya —事態の個別性とレアリティー—」, 益岡隆志 (編) 『条件表現の対照』, 65-82, くろしお出版.
- 蓮沼昭子 (1985) 「「ナラ」と「トスレバ」」 『日本語教育』 56, 65-78, 日本語教育学会.
- 蓮沼昭子・有田節子・前田直子 (2001) 『日本語文法 セルフマスターシリーズ 7 条件表現』 くろしお出版.
- 益岡隆志 (1993) 「日本語の条件表現について」 益岡隆志 (編) 『日本語の条件表現』, 1-20, くろしお出版.
- 김민영 [キム・ミニョン] (2009) 「한국어 접속문의 시제 해석」 『한국어학』 43, 69-104, 한국어학회.
- 박승윤 [パク・スンユン] (1988) 「국어의 조건문에 관하여」 『언어』 13 (1), 1-14, 한국언어학회.
- 오윤경 [オ・ユンギョン] (2019) 「조건 표지 ‘-다면’의 형성과 특성」 『언어사실과 관점』 48, 441-469, 연세대학교 언어정보연구원.
- 이광호 [イ・クァンホ] (1980) 「접속어미 「-myen」의 어미기능과 그 상관성」 『언어』 5 (2), 33-65, 한국언어학회.
- Akatsuka, Noriko (1985) Conditionals and the Epistemic Scale. *Language* 61. 625-639. Linguistic Society of America.